

第3節 扁平打製石斧について

駒方C遺跡から出土した扁平打製石器類は扁平打製石斧・横刃形石器・十字形石器・円盤状石器の4器種54点が出土した。中でも扁平打製石斧が圧倒的に多く、全体の80%以上を占める。

以下、扁平打製石斧について若干の考察を加える。

1. 石 材

当遺跡出土の扁平打製石斧に利用される石材は大きく3種類に限定できる。

1) は大野川流域で採取される、傾山系で産出する石英玢岩で、この石材利用の石斧は、一般的に片面に自然面を残し、刃部は円礫剝離の剝片の尖部をそのまま利用するといった量産目的の荒い加工の物が多く、このタイプの石斧には大型製品が多い。形態的には基部と刃部幅の較差の大きい「撥形」を呈する。全体の20%の使用量である。

2) は遺跡とは非常に近距離にある同町片島で産出する通称「片島石」あるいは「鉄平石」と呼ばれる輝石安山岩で、同石材は節理面から扁平に剝離し、比較的堅固な性質をもつ。剝離当初から角礫棒状の様相を呈しており、この結果、この石材利用の石斧は基部と刃部幅の較差の少ない長方形形状を呈する。産出地及び加工の容易さから、この石材利用石斧は全体の40%を占める。しかし、使用頻度の高い石材のためか、石斧の欠損品の半数以上も当石材が占める。

3) は朝地変成岩中に含まれる緑色片岩で、これも同北町で産出される。板状に剝離し、粘質力は強いが強打には弱い性質をもち、従って当石材利用石斧には欠損品が多い。原石産出地が近距離である事、加工が容易である事等から2同様40%の利用率である。

横刃形石器とした器種も前2石材が主体となる。

2. 形 態

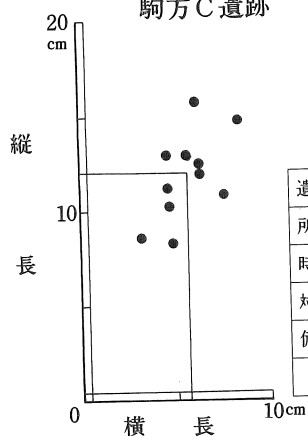
県下で縄文時代後期から晩期初頭にかけて多量に出土する扁平打製石斧はその形態から「撥形」、「短冊形」、「分銅形」に3分類されることが多い。この中で「分銅形」は県下ではその出土量は少量で、しかも晩期に集中する傾向があり、従って県内縄文時代後期遺跡である野津町内河野遺跡^{註1}、大野町夏足原遺跡^{註2}、竹田市楠野遺跡^{註3}等では「撥形」と「短冊形」に限定される。この形態は地域あるいは石材に関係なく普遍的なものと言える。しかしながら「撥形」と「短冊形」石斧の2者の利用頻度には各地域でその較差を見出すことが可能である。これは前述した素材となる石材剝離の結果生じる剝片の形態がそのまま石斧の形体に反映されるといった消極的な結果によるものと思われる。つまり遺跡周辺で豊富に産出される石材の利用頻度が当然高くなり、これがそのまま較差として現われる。

このことから推察すると扁平打製石斧の形態変化は利用目的に応じた結果によるものとは考えに

第34表

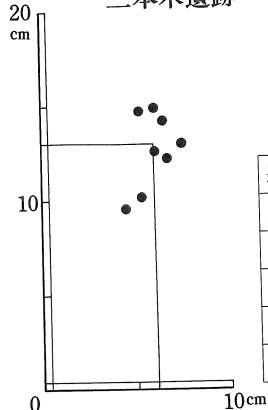
大野川流域各遺跡出土扁平打製石斧縦長・横長対比表

駒方C遺跡



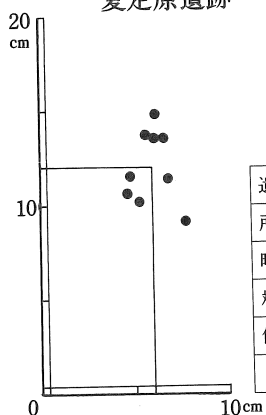
遺跡名	駒方C遺跡
所在地	大野郡大野町
時期	後期後半(三万田)
対象点数	11点
備考	大野川中流域

二本木遺跡



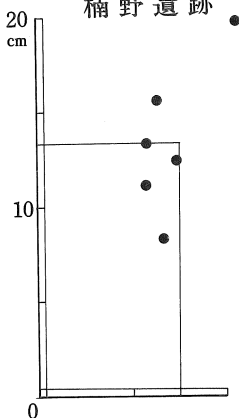
遺跡名	二本木遺跡
所在地	大野郡大野町
時期	後期後半
対象点数	8点
備考	大野川中流域

夏足原遺跡



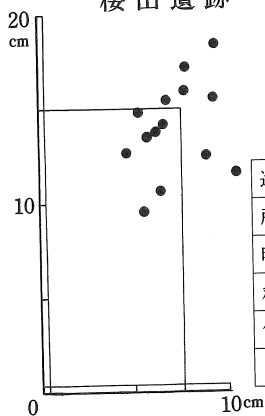
遺跡名	夏足原遺跡
所在地	大野郡大野町
時期	後期後半～晩期初
対象点数	9点
備考	大野川中流域

楠野遺跡



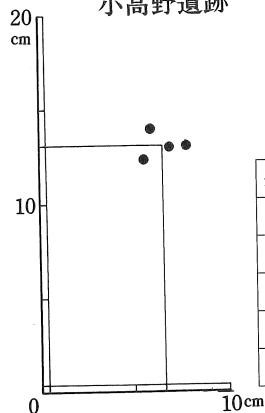
遺跡名	楠野遺跡
所在地	竹田市
時期	後期後半～晩期初
対象点数	6点
備考	大野川上流域

桜山遺跡



遺跡名	桜山遺跡
所在地	直入郡萩町
時期	晩期初頭(1式)
対象点数	15点
備考	大野川上流域

小高野遺跡



遺跡名	小高野遺跡
所在地	竹田市
時期	晩期初頭(1式)
対象点数	4点
備考	大野川上流域

くい。

3. 重 量

完形品のみを対象とした重量は34gから344gと幅があり、平均約150gである。しかし重量比定については、サイズ、石質等でその差異が大きくなるため、ほとんど意味がない。

ただ同遺跡における玢岩を素材とする石斧は、その剥片剥離の性格上、他2石材利用石斧の断面厚平均が1.4cmに対し、1.9cmと圧倒的に厚く、従って重量も重いものが多い。

4. 大 き さ

扁平打製石斧の形態差が利用石材差によるものと前述したが、ここでは地域、時期面から、石斧の大きさに差異があるか否かについて検討するために、大野川中・上流域所在の縄文時代後・晩期遺跡を選出して比較の対象資料とした。

対象とした遺跡は、大野川中流域では、後期後半期の^{註4}大野町所在二本木遺跡、やや新しく位置づけられる同町夏足原遺跡、上流域では竹田市楠野遺跡と縄文時代晩期初頭に入り竹田市小高野^{註5}遺跡^{註6}荻町桜山遺跡でこれらの遺跡から出土の完形扁平打製石斧の縦長、横長比により大きさを比較してみた。ただし、比較資料が各遺跡とも少量であり厳密なデーターとは言えず、平均値による考察を行った。

この結果、時期的にも地域的にも明確な変化が認められた。具体的には、時期面から見ると、後期後半の石斧より晩期初頭期に出土する石斧の大きさが明らかに拡大していることで、このことは形態的には「短冊形」とした細身の長二等辺三角形形状から、刃部幅の広い「撥形」への変化であり、駒方C遺跡の平均値と比較すると、縦長で3cm、横長で2cmもの差が生じてくる。

また、地域的に見ても中流域より上流域出土石斧はやはり拡大化する傾向がうかがえる。

上記の結果だけ見ると、石斧の拡大化の原因が筆者の言う^{註7}素材差と吉留秀敏の指摘する時代差のいずれの可能性も示唆するようであるが、比較対象とした資料が非常に偏在的であり、^{註8}いずれかの限定にはさらに資料の増化を期待したい。

註

1. 後藤一重・栗田勝弘「野津川流域の遺跡 Ⅲ」 野津町教育委員会 昭和57年
2. 牧尾義則・玉永光洋「大野原台地の遺跡 Ⅲ」 大野町教育委員会 昭和53年
3. 玉永光洋編「楠 野」(大分県文化財調査報告 第63輯) 大分県教育委員会 昭和58年
4. 二本木遺跡出土の扁平打製石斧の時期決定は研究者により差があり断定はできないが、ここでは吉留秀敏「先土器時代・縄文時代の石器」(「楠野」大分県文化財調査報告 第63輯)の時期設定を採用した。
5. 賀川光夫編「小高野遺跡調査報告」(別府大学考古学研究報告 4) 別府大学 昭和49年
6. 賀川光夫編「大分県荻町桜山遺跡—縄文晩期農耕の起源に関する研究」(別府大学考古学研究報告 4) 昭和46年
7. 注3と同じ
8. 県内の縄文時代後期遺跡は大野川中流域までに集中しており、上流域になると、その数は減少する。ところが晩期に入ると全く逆の傾向を呈するようになり、互いに比較資料の偏在性が強く、現状の資料では非常に対比困難。